



| | |
|--------------|---|
| Title | メルロ＝ポンティのプルースト読解 : 「感情の制度化」とアルベルチャーヌ |
| Author(s) | 井上, 直子 |
| Citation | Gallia. 2020, 59, p. 79-88 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/77095 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

メルロ＝ポンティのブルースト読解 ——「感情の制度化」とアルベルチヌス——

井上 直子

メルロ＝ポンティは1945年に *Cahiers du Sud* に発表した「小説と形而上学」において文学者たちの哲学的側面を挙げ、古典的な形而上学が完成された概念の配列の上に成立していたのに対し、今後は「世界に対する態度」が問題になると記す。その上で文学も哲学も政治もこの態度を違った形で表現したものにすぎないとして、文学と哲学は切り離し難いと結論づける¹⁾。さらに1951年にジュネーブで行った講演、「人間と逆行性」では、20世紀の新しい歩みをフロイトと関連させて「身体と精神との境界線を消し、人間の生を精神的でもあれば肉体的でもあるものとして見る²⁾」と述べ、この傾向を言語、政治にも見出して分析している。

このように、文学と哲学、身体と精神を分かち難いものと見なしつつ、メルロ＝ポンティはブルースト、クローデル、マルロー、スタンダール、ヴァレリーなどの名をさまざまな著作で引用する。本論文ではこの中の一つ、2003年に刊行された『制度化・受動性、コレージュ・ド・フランス講義ノート(1954-1955)』³⁾の「感情の制度化」におけるアルベルチヌスの分析を取り上げる。アルベルチヌスに関してはサルトルが『存在と無』の対他存在の項目で分析し⁴⁾、またレヴィナスも他者との関係で考察している⁵⁾。先行研究としては、このテキストを単独で分析するのではなく、メルロ＝ポンティのブルースト理解がのちのマックス・ヴェーバーの解釈に反映されていることを示す論文⁶⁾、ソルボンヌ大学での講義、「幼児の対人関係」と関連させて嫉妬と愛という観点から分析した論文⁷⁾がある。これに対し本論文はメルロ＝ポンティにおける「文学と哲学の重なり」の一例としてこのテキストを解釈し、「制度化」講義の二年前にコレージュ・ド・フランスで行った「言語の文学的用法の研究」の講義とのつながりを示す。そのために「感情の制度化」が何を問題にしているのかを明らかにし、メルロ＝ポンティがブルーストの

1) «Le roman et la métaphysique», *Sens et non-sens*, Gallimard, coll. «NRF», 1996, p.34-36.

2) *Signes*, Gallimard, 1960, p.287.

3) Maurice Merleau-Ponty, *L'Institution, la passivité, Notes de cours au Collège de France (1954-1955)*, Belin, 2003. 以下 IP と略し、引用文中にページ数とともに記す。

4) Jean-Paul Sartre, *L'Être et le néant*, Gallimard, coll. «Tel», pp.406-407.

5) これについては澤田直「他者の現象学—ブルーストを読むサルトル—」、『言語文化』第32号、明治学院大学、2015年、78 - 94頁。サルトルはブルーストを通じて他者の所有という問題を扱う。レヴィナスはブルーストの自我の二重化に注目し、「自我」の中に他者性が留まり続けることがブルーストの本質だととらえる。

6) 加國尚志「感情の制度化——メルロ＝ポンティの1954-1955年講義より——」、『立命館文学』、第587巻、2004年、313-323頁。

7) 酒井麻衣子「メルロ＝ポンティにおける嫉妬と愛」、『立命館大学人文科学研究紀要』、第112号、2017年、45 - 70頁。

愛の分析において最も強調した「否定的な愛」の論を整理したのち、ブルーストの読解がこの時期のメルロ＝ポンティの思索にどう関わるのかを考察する。

1. 「感情の制度化 (institution)」の問題提起

制度化とは「構成」に対立するものとして着想された概念である⁸⁾。この用語について、メルロ＝ポンティは確定的な定義を与えているわけではないが、すでに『知覚の現象学』(1945)において「感情を制度化する」という表現を用いている⁹⁾。また1968年に刊行されていた『制度化』の「講義要約」の冒頭では、「制度化」の概念を、「意識の対象には構成されたものしかない」という哲学の難点に対する「治療薬」として提案しつつ (IP, 123)、次のように説明する。意識の対象には構成されたものしかないとすれば、意識と対象は分離されたままで、両者の交代はない。また意識自身についても、過去の自分は現在の自分と分断されているため、他者と同然のものである。これに対し、主体が「制度化」的になると、記憶は過去にあるのではなく、また再生されたものとして現在にあるのでもなく、ただ主体の生成の場としてその中間にある。そしてそれゆえに、私と他者との関係も二者択一に還元されず、両者は共存可能である (IP, 124)。このことは『制度化』本文において、さらにくわしく述べられる。「従って、制度化された主体と制度化する主体があり、これらは分けることができない。構成する主体はそうではない。それゆえ、一種の惰性、……に晒される [という事実] がある。——しかし、[これが] 活動、出来事、現在に対する参入を起動し、その参入は現在以降も生産的なものとなる。——ゲーテ。天才は『死後も生産を続ける者』であり、一つの未来を開く。主体とは、出来事のある次元が到来することのできるもの、諸領野の領野 (champ) である。」 (IP, 35) つまり、制度化の関係においては、主体は構成の関係に見られるような固定され、閉ざされたシステムには留まらず、そのシステムは常に外に向かって開いており、そこから変化を受け続け、その変化は未来をも変えていく、ということである。この点は言語に関する分析を見れば一層明らかである。書物としては完結しなかった『世界の散文』で言及される「制度化するパロール」についての分析を取り上げよう。周知のことだが、メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』で「話している言葉」(parole parlante) と「話された言葉」(parole parlée) を区別しており、この区別は「表現の科学と表現の経験」、「間接的言語」(いずれも『世界の散文』所収) などでも述べられる。話された言葉とはすでに完成された言語のシステムに取り込まれた言葉であり、話している

8) 「制度化」の概念を総体的に考察した研究として Koji HIROSE, *Problématique de l'institution dans la dernière philosophie de Maurice Merleau-Ponty, Événement Structure Chair* (Université de Tsukuba, 2004) がある。この概念をドゥルーズ、ガタリ、フーコーとの関係においてとらえたものが、廣瀬浩司「意識を治療すること—メルロ＝ポンティの制度化概念とガタリの制度分析—」(『論叢現代語・現代文化』、筑波大学、第4号、2010年、1-23頁)、「制度化するパロール」に着目し、メルロ＝ポンティが言及するゴルトシュタイン、カッシーラー、フンボルトの言語哲学との関わりで分析した論文が廣瀬浩司「メルロ＝ポンティにおける制度化するパロール—: 制度の間文化現象学序説」(『論叢現代語・現代文化』、筑波大学、第17号、2016年、55-70頁) である。

9) *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, coll. «Tel», 1993, p.220

言葉とは、そのシステムに属しながら、その時々で新しく生まれ、そのシステムを揺り動かす言葉である。そして「制度化されたパロール」は後者と同一視されている¹⁰⁾。つまり「制度化」には、システムの枠を保ちながらもそこには収まらず、それを刷新していくこと、すなわち「システムの活力の実際的な枠組み」(IP, 43)という意味合いがある。

では、この文脈でブルーストはどのように分析されるのだろうか。「制度化」の考察に照らすと、メルロ＝ポンティは「私」がアルベルチヌとの関係に見る変化、過去の再解釈という点に着目していくはずである。事実、『制度化』講義の「要約」には次のような一節がある。「ブルーストにおける愛の分析は、過去と未来、主体と『対象』、肯定と否定といったものの『同時性』、両者がそれぞれ他方をもとにして行う結晶化を示している。」(IP, 124)ここでは、一見対立すると思われる要素が互いに排斥することなく関わりあい、その関わりが新たな「結晶化」を生み出すとされている。この「結晶化」という言葉はスタンダールの『恋愛論』からの借用であるとともに、講義では「揮発状態」(à l'état volatil)という表現と対にして用いられており(IP, 71)、『失われた時を求めて』におけるアルベルチヌの出奔の際の「私」の心情(IV-4¹¹⁾)を踏まえている。すなわち、自分でも把握しきれなかった曖昧な状態が、何かをきっかけにして明瞭にとらえられるようになる、という意味を持っている¹²⁾。

この「講義要約」は、現象学が「あるものはある」という前弁証法的定式(formule pré-dialectique, 「ある-ない」という対立を突きつめる以前に断定してしまうこと)によって片付けられるわけにはいかない、という表明で終わる(IP, 126)。そもそも「私」のアルベルチヌへの愛は、最初から「あるものはある」という定式で説明できるものではなかった。出会った時のアルベルチヌは、バルベックの娘たちの「全員を愛していた」(II-189)私にとって、あくまでもその一人に過ぎず¹³⁾、またこの出会いに関して、「私」は「ある女性を愛している時、我々は相手の中に自分を投影しているだけだ」(II-189)と言う。またバリで再会した時も「確かに私はアルベルチヌを愛してはいなかった。戸外の鶯の娘」(II-649, IP, 134)とされる。次にバルベックで会った時、「私」はコータルにアルベルチヌとアンドレが胸を合わせて踊っていることを指摘され(III-191)、同性愛を意識する。その後恋心を抱くようにも思えるが、やがてそれも醒め、「アルベルチヌとの結婚は愚行(folie)」(III-497)とさえ考えるようになる。それが再び燃え上がるのは、アルベルチヌがヴァントゥイユの娘を知っている、と言ったことだった。「私」は同性愛の相手に激しい嫉妬を燃やし、それが恋心のようなものとなって「何としてもアルベルチヌと結婚しなくてはならない」(III-515)と母

10) 廣瀬浩司「意識を治療すること—メルロ＝ポンティの制度化概念とガタリの制度分析—」、9頁。

11) ブルーストからの引用は Marcel Proust, *À la Recherche du temps perdu*, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», tome I-IV, 1987-1989. 文中に巻、ページ数を記す。

12) この「結晶作用」という言葉はサルトルも『存在と無』で用いている。*L'Être et le néant*, p.608.

13) メルロ＝ポンティはこのことを「彼は彼女の中に『他者』(Autre)、一般性、バルベックを愛する」(IP, 68)と表現する。

に宣言するに至る。しかしいざ自分の家に幽閉してみると、「私はアルベルチーヌのことをもはや少しも美しいとは思わず、一緒にいても退屈で、もう愛していないというはっきりとした気持ちを抱き」(III-522)、出かけると愛しく思う。ここでは、対象が存在する時には愛は不在、対象が存在しない時には愛が存在する、という関係が成り立っており、眠っているアルベルチーヌは、肉体としては存在しても意識を持つものとしては存在しないという点でその唯一の例外である。この矛盾を孕んだ関係はアルベルチーヌの出奔後も変わらない。呼び戻そうと躍起になる「私」の頭の中にあるものは、アルベルチーヌの魅力が乗り移った「アンカルヴィルやヴェルデュラン家やレアの新たな役割」(IV-48)や、オルセー駅、電報を打つサン＝ルーであり(IV-48)、「私」の思考にはアルベルチーヌその人はいない。そんな「私」のもとにアルベルチーヌの事故死の知らせが届く。この知らせは「アルベルチーヌが私の心の中でこれほど生き生きと生きていたことはない」(IV-60)と描かれるように「私」の中に愛を再燃させるが、それも少しずつ薄れてきた頃、今度はアルベルチーヌから「生きています」という電報(これは誤報である)が舞い込む。しかし「私」の中ではアルベルチーヌはもはや忘れられていて、それほど喜びをもたらさない。そして「私」は「アルベルチーヌをもう愛していないことに気づき」(IV-220)、さらに「私はアルベルチーヌを愛するのを決定的にやめ」る(IV-223)。「私」は絵の登場人物がアルベルチーヌと同じコートを着ていることを発見して軽い胸の痛みを覚えるものの、それもやがて消え、アルベルチーヌへの愛は終わる。

こうした関係の中でメルロ＝ポンティが目にするのは、「純粋な愛(=対象に直接向かう愛)が不可能であるということ」である。「講義要約」では、真の愛とは「対象の内的イメージ」ではなく他者そのものに達するものだと述べられ、こうした愛はそもそも不可能なのだが、ここではそれが不可能であるということを確認すべきだとされる(IP, 124)。つまり「私」のアルベルチーヌへの愛は決して本人には到達せず、その意味で「私」の愛は「純粋な愛」、「真の愛」とは言えないが、メルロ＝ポンティはそこに真の愛ではない所以を見るべきだと言う。こうしてメルロ＝ポンティは、プルーストの中に純粋な愛の否定的なあり方(via negativa(IP, 124))をとらえようとする。しかし、「制度化」の枠組みで考察するということは、メルロ＝ポンティはこの愛を単に「否定的」なものでは終わらせず、その否定的なあり方の中に新たな地平を見出すことになるはずだ。講義ノートは「幻想」、「肯定的幻想」、「否定的な愛」、「否定的幻想」というように論が進んでいく。次節では、講義ノートにおける論の展開を追いながら、この複雑な愛がどう帰着するのかを検証する。

II. 否定としての愛

講義ノートの冒頭で、メルロ＝ポンティは、我々が他者も自分と同じように自由な存在であることを忘れていて、と言い(IP, 63)、そこから愛の本質を1)この自由を密かに意識すること、2)意識が他者によって脅かされているという意識を

持つこと（つまり、私とは単に自分が私にとってあるものというだけにとどまらず、他者にとってあるものにもなっているということ、3) 私を他者によって確認させたい、認識させたい、報われさせたいという欲求、4) この意識の上に成り立った共通の生、とする。つまり、他者にも自分にもそれぞれの意識があるのだから、a) 他者は私を本当には認識しない、b) 私が他者を本当には認識しない、ということになる (IP, 63)。すなわち、「他人が私を認識する」とか「私が他人を認識する」とかいうのは幻想であり、この二重の幻想が「私たち」を作っている。これに対し、一方通行としての愛は a) 主観的な愛、b) 愛が他人に自分を認めさせようとする意志の上に構成されていることへの自己満足、c) 偶然（愛するのが「その人」である必然性がない）である。これらはいずれも、「その人がその人でなくてはならない」ことに関係せず、他者の存在にお構いなしに生まれる愛である。ブルーストの愛はまさにこの愛であり、「主観、偶然、狂気の愛」と表現され、他者の幻影 (mirage d'autrui) の上に成り立つとされる (IP, 64)。この指摘はもちろん小説の「幻影ばかりを追うのが、つまりその現実の大部分が私の想像の中にある存在ばかりを追うのが、私の宿命だと思い出させてくれた」(9-365～366)などの記述も踏まえているだろう。メルロ＝ポンティは「満足した愛は死んでしまい、略奪か嫉妬によってしか再生しない」として、語り手の愛は「不可能なものとしての愛」、「薬のない苦しみとしての愛¹⁴⁾」、「嫌悪としての愛」が全てで、愛の現実などはないと言う (IP, 64)。ブルーストの愛が「否定的」とされる所以はここにある。尤もメルロ＝ポンティは、ブルーストがこのことを真実の半分に過ぎないと理解していたと見なし、そこに他者の介入を見て「私と私の完全性は、この完全性が他者の存在によって壊されるということを前提としている」(IP, 64-65)と述べる。つまり「私」とアルベルチーナの愛は、他者に直接向かわないものでありながら、ナルシスティックに完結することなく他者の存在を求め、という複雑な関係の上に成り立っている。メルロ＝ポンティは「感情の制度化」の講義に入る前の部分で、他者について次のように定義する。

（他者とは）構成されたもの—構成するもの、つまり私の否定ではなく、制度化されたもの—制度化するものである。すなわち、私は他者に自己を投影し、他者は私に投影する。そこには投影—取込みの関係があり、私が他者においてなすことと、他者が私においてなすことによる生産があり、二次的な引き込みによる真のコミュニケーションがあるのだ。これは相互主観的、あるいは象徴的な領野 (champ)、文化的な対象の領野であり、それが主体と客体の交代の代わりに、我々の場 (milieu)、我々の蝶番 (charnières)、連結 (jointure) となる。(IP, 35)

14) ここで「薬」の比喩が出てくることは重要である。『ソドムとゴモラ』で「私」はアルベルチーナに毒と薬の両面を見ている。「私」に苦痛をもたらすのも、その苦痛を癒してくれるのも、いずれもアルベルチーナの存在だからだ (III-503, IP, 135)。メルロ＝ポンティはのちにこの二面性に触れるが、ここでは「薬のない苦しみ」として毒の一面だけを取り上げている。

「講義要約」でも述べられたように、構成された「主体と客体」は役割を交代することなく存在するが、制度化において、この両者は「蝶番」のようなもので結びつけられながら共存している。この結びつきは本文で「鏡」とも表現され、この観点からメルロ＝ポンティはスワンとアルベルチヌを分析の対象とする。しかしスワンの恋に関しては、オデットがスワンを愛していないことから、「一方からの愛」に留まる「否定的なナルシシズム」であるとして（*IP*, 67）、「二人の間の愛」としてのアルベルチヌの分析が中心に据えられる。この分析は、1)『ソドムとゴモラ』の終わりまで、2)『囚われの女』以降、の二つに分かれ（*IP*, 69）、前半では、先に挙げた「不可能なものとしての愛」、「葉のない苦しみとしての愛」に対応する「嫌悪としての愛」、「嫉妬に相当する愛」、「苦痛と不在の探求に相当する愛」が検討される。この点を理解することはさほど難しくない。考察が複雑さを増すのは、メルロ＝ポンティが後半で取り上げようとする、「嫉妬と苦痛の愛は、語り手自らが、自分の愛する能力を疑っていることから生じている」という点である。「私」の愛はアルベルチヌその人ではなく、バルベックの娘たちという一般性の中から、偶然に一人を選んだに過ぎない。これはアルベルチヌにとっても同様で、「彼女もまた彼を愛さない。」（*IP*, 69）メルロ＝ポンティはこの関係が自分への疑いの上に成り立っているとし、「否定としての現実的な愛」という項目を立てて「鏡」の関係に触れている。「他者と愛する人：鏡：なぜなら人は、自分が愛されていないと思うことを好まないからだ。」（*IP*, 69）鏡は蝶番と同様、私と他者を結びつけるものである。愛する人と自分が向き合うことで、自分は愛されている気になる。ところが「私」の場合は、自分が愛していないために、鏡の中の他者からも愛されない。この関係をメルロ＝ポンティは、「自分の感情が相手からの経験を作る」ととらえ、「自分に従って他者を作り、このように構成された他者に従って自分を作る。愛がないところに相思相愛はない。しかし、愛とはまさに（略）鏡のこうした関係を作ることにある。」（*IP*, 74）と述べ、『ソドムとゴモラ』における「二段階のリズム」に言及する（*IP*, 68）。バルベックのホテルで、「私」は自分が好きなのはアンドレだ、と嘘をつくが、その心理は「自分を疑うあまり、女が自分を愛してくれることも、また自身が彼女を本当に愛しているということも信じられないあらゆる男の愛が受け取る二段階のリズム」（III-223, *IP*, 134）と描写される。これについてメルロ＝ポンティは「彼はアルベルチヌの愛を疑い、自分が愛されているとは思っていない。彼は自分の愛を疑っているからであり、自分が愛していないからだ。」（*IP*, 68）とする。

こうした複雑な関係の中で、メルロ＝ポンティは愛の到達点を「愛の超現象学的な現実」と呼び、これを「所有の現実」か「他者による疎外の現実」（*aliénation par autrui*）か、と自問する。所有とは、冒頭で述べたように「他者も自身と同様に自由を持っていること」を無視して自分のものにしようとすることである。この時、他者は自分の中に取り込まれる。これに対して疎外とは、『幼児の対人関係』の定義を借りるならば、「私を自分独りであることから引きはがし、私と他人との

混合を創設する (institer)」状態と要約できる¹⁵⁾。つまり、そこには他者がつきまわっている。さらにメルロ＝ポンティはこの他者を「私の中の他者」(IP, 70)とみなしており、アルベルチヌスがヴァントウイユ嬢を知っていると聞いた瞬間、「二歩ほど離れたところ」にいるアルベルチヌスが、その実「私の心の中に」存在する (III-501) という箇所を引用する。メルロ＝ポンティはアルベルチヌスの「毒」としての面を挙げ、それがプルーストにとって愛の半分に過ぎないと述べていたが、ここでのアルベルチヌスは「私」の中に存在するようになり、それによって「苦痛をもたらすもの」であると同時に、「その苦痛を癒すもの」、すなわち「毒でありながら薬でもある」という二面性をくっきりと持つようになる¹⁶⁾。

ただし、先に見たように愛が自分への疑いだけに基づいているとすれば、「私」の中に入り込んだ他者は何の役目も果たしていないことになる。事実メルロ＝ポンティは「他者への疑いが自分への疑いから来ているなら、自分を信じれば他者を信じることになる。恐らくそこから相思相愛が生まれる。」とする。しかし実際には、プルーストも小説中で「多くの人にとって相思相愛の恋など存在しない」(III-229) と言うように、「私」が自分を信じることで他人をも信じるようになる、ということは起こらない。「自分への疑い」は、今度は「他者への疑い」になり、そこから唯一疑いを持たずにいられる存在として、眠るアルベルチヌスが言及される。

このように否定的な愛 (via negativa) について分析してきたメルロ＝ポンティだが、そんな愛が確かなものになる瞬間がある。「私」がアルベルチヌスの出発を知った時である。講義ノートでは「私は自分の愛を信じていなかった。なぜなら愛が『揮発状態』にあるからだ。それがアルベルチヌスの出発によって『結晶化』された時、私はそれを信じる。」(IP, 71) と書かれる。「私」はアルベルチヌスを愛していないと思ひ込み、自分の心を明晰に理解しているものと思っていた。しかし実は、その状態とはさまざまな要素が揮発しつつある状態で混ざっているもので、それら一つずつ分離して固体化した時に、初めて正しい認識が可能になる。こうして「私」は、自分がまぎれもなくアルベルチヌスを愛していたということを「塩の結晶作用のように」(IV-4) 明瞭に理解する。メルロ＝ポンティは、この「結晶化」を出発点に、愛の新たな地点への到達を描く。次節ではこの新たな地平と「哲学者の同時代の考察との関連を示す。

III. 新たな地平へ

「結晶化」によって「私」が愛を信じるようになったと述べたのち、メルロ＝ポンティはアルベルチヌスへの愛の経過を列挙する (IP, 72)。第一に、「出発点が自己中心的なものだったとしても、愛は独語以外のものになる」こと、第二に、始

15) Maurice Merleau-Ponty, «Les relations avec autrui chez l'enfant», *Parcours (1935-1951)*, Verdier, 1997, p.228.

16) 「彼女は私に、焼けつくような毒に効く唯一の薬を与えてくれた。それを与えられるのは彼女だけだったが、この薬は実は毒と同質のものだった。一つは優しく、一つは残忍なのだが、どちらもアルベルチヌスから出てきたものだった。」(III-503, IP, 135)

まりが想像上のものだったとしても、「想像力が期待させるものの代わりに、人生は我々には想像もしなかったものを与えてくれる」（この引用は『消えさったアルベルチヌ』からのもので（IV-82）、メルロ＝ポンティは一部を省略している）こと、第三に、「たとえ愛が『一般的』であろうと（ジルベルトからアルベルチヌへのこだま）、アルベルチヌの愛は七重奏曲がソナタ（主観的なものの現実性、準プラトン主義）と異なるのと同様、以前の愛とは異なる」ことである。第一の点は、愛がナルシスティックな状態には留まらないこと、第二の点は、アルベルチヌへの愛によって「私」が思わぬ地点に運ばれたということ、そして第三の点は、アルベルチヌと過去の愛との関係について、メルロ＝ポンティが小説よりも踏み込んだ考察をしていることを示している。『囚われの女』において、「私」はヴェルデュラン夫人邸での夜会で、聞いたことのない曲に出会う。ところがその中に馴染みの小楽節を聞き取ったことで、この七重奏曲がヴァントウイユの作品であることを知り、自分が熟知していたソナタ、さらには他の作品が七重奏曲の素晴らしさには到底及ばないと述べたのち、作品間のこの関係に自身の恋愛を重ね合わせて「私はヴァントウイユの作りえた他の作品をそれぞれ閉ざされた世界であると考え、私の愛の一つ一つも同様だと思わずにはいられなかった。」（III-756, *IP*, 135）と言う。さらに「アルベルチヌへの愛ではなく、私の全生涯を考えると、これまでの全ての愛はこの愛を準備するささやかで小心な試み、この最大の愛への呼びかけに過ぎなかったのだと認めざるをえない。」（III-756～757, *IP*, 135～136）と結論づける。この点をメルロ＝ポンティは強調し、「過去の愛と違う」と明確に言い切っている¹⁷⁾。本論文で強調したいのは、ここに恋愛という構成されたシステムがアルベルチヌへの愛という新しい出来事によって動かされる、という「制度化」の定義の構造が見いだせることである。

この三つの点を挙げたのち、メルロ＝ポンティは「愛を作ったのは出奔だと言わなくてはならないのだろうか」と問いかけ、『消え去ったアルベルチヌ』における「我々が恋をしていると知るために、おそらく恋をするためにすら、別れの日が訪れなくてはならない」（IV-88）という言葉を用いたのち、「逆だ」と述べて「愛は別れの中にしか実現しなかった」（*IP*, 72）と記す。アルベルチヌが生きていた時から、「私」は彼女の死を思い（IV-57）、帰ってきてほしいがために別れの手紙を書いていた。こうしたあり方から、メルロ＝ポンティは愛とは否定的なものだと改めて結論づける（*IP*, 72）が、その際に「私」がアルベルチヌを忘れ始めた頃に届く電報（IV-220）に注目する。「私は生きています」という電報を受け取った時、「私」の中では、祖母の死を知った時と逆のことが起こる。「私」は無意志的記憶によって祖母が生きた存在になった時、初めて悲しみを感じた。これに対し、アルベルチヌは「私」の思考の中でもう生きていないため、本人が生きていくという知らせは「私」をさほど喜ばせない。ブルーストはこのエピソードを「自我の交代」と見なし、新しい自我がアルベルチヌに無関心になっ

17) このことは先に挙げた酒井麻衣子氏の論文「メルロ＝ポンティにおける嫉妬と愛」（pp.61-65）においても述べられている。

たために忘却が進んだととらえる (IV-221)。一方メルロ＝ポンティは、プルーストのように過去の自分と現在の自分を分断させることなく、単に「自分の中の他者」という点からこの出来事を考察する。もし愛が生身のアルベルチヌの存在を目指すものだったとしたら生きていた知らせは喜びをもたらしたはずだ。しかし先に挙げたように「私」は「アルベルチヌを私の中に置いた」と表現し、さらに「アルベルチヌの死が私の苦痛を消すためには、衝突の衝撃がトゥーレーヌにいるアルベルチヌを殺したのみならず、私の中にいるアルベルチヌをも殺さなくてはならない。」(IV-60) と言っており、「私」にとって、愛されたアルベルチヌはあくまでも自身の中にいた存在である。そしてこの他者が消えると愛も消えてしまう。「私」の愛が消えたからアルベルチヌの存在が消えたのではなく、他者の存在が消えたことを受けて、「私」の愛が消えたのである。先に他者と私が「蝶番」の関係にある、ということも挙げたが、ここでも「私」は自分の中の他者からの働きかけを受け続けている。「この知らせは忘却を『早め』、彼女がもはや彼の中に生きていたのではないと感じさせる。思い出と愛は死という最も大きな不在によって延長された。我々は不在しか愛さない。愛とは我々の中に穿たれたもので、他者の存在ではない。治療薬は痛みと同じだ。他者の存在は、つねにその他者の不在の証明なのだ。」(IP, 73) 「私の中」に取り込まれた他者は、我々の中に愛となって存在するが、それは他者そのものではないことから、「不在」と表現される。従ってその他者を愛することは不在を愛し続けたということになり、また不在こそがその愛を継続させたとも言える。そしてこの不在を埋める所有はない (IP, 73)。メルロ＝ポンティは「超現象学的な愛」とは「所有」か「疎外」か、と問いかけていたが、ここでははっきりと疎外であるという答えが示される。「疎外(挫折)は愛とは一体のものであり、愛の現実である。愛は自己の彼方、所有という偽りの欲求の彼方にさえ運んで行く。人は他者を生み出すが、自分と他者のどちらが不在なのかはわからない。」(IP, 74)

本論文が注目したいのはこの「彼方」という表現である。このことはまた「想像したもの」の代わりに、生は他のものを与える。そしてそれは、密かに望まれていたものであり、偶然のものではない。実現とは予測されていたものではなく、欲されていたものである。」(IP, 75) とも書かれる。つまり、潜在的に欲されていたものが顕在化し、それがあらかじめ構築されていたものとしてではなく、思いがけない「他のもの」として与えられる。メルロ＝ポンティは講義ノートの終わりに、愛とは、偶然によって作られるのでも決定によって作られるのでもなく、問いと答えの連なりがあるということから生み出される (IP, 76) と述べる。その中で「私」は探していたものではなく、別の惹かれるものを見つける。「最初の意味付与は保たれるが、他の方向においてである。そしてそれは、最初の意味付与と関係のないものではない。こうして偶然、しかも根本的に偶然であるものが求められていたものになる。」(IP, 77)

偶然と思われた最初の段階が、後に必然だったと気づかされる、ということは、過去は未来によってとらえ直されているということである。この「彼方」へ向か

う動きこそが、構成されたシステムに収まらずに新たな動きを生み出す「制度化」の本質ではないだろうか。そしてこのとらえ方は同時期の文学を扱ったテキストにも共通している。2013年に刊行された『言語の文学的用法の研究』は、1953年にコレージュ・ド・フランスで行われたヴァレリーとスタンダールに関する講義の内容を初めて公にするものだが、そこでメルロ＝ポンティはヴァレリーの「キアスマ」と同様、錯綜体の概念に強い関心を示している。錯綜体とは『固定観念』に登場する用語で、潜在的なものの総体を指す¹⁸⁾。哲学者が言語に二つの層を見ていたことはすでに述べたが、ヴァレリーの分析において、「話されている言葉」は潜在的な可能性を含むものとして現れ、メルロ＝ポンティはこれを詩的言語との類似で分析し、潜在的なものが顕在化する瞬間、構成されたシステムが内部から揺り動かされるということに着目している。この観点は「感情の制度化」において分析される「他者の介入」による働きかけと同質のものである。

「私」のアルベルチヌへの愛は、苦痛、嫉妬、不在など、否定的なあり方でしか存在せず、アルベルチヌの出奔という決定的な不在によって逆に愛の確証をもたらす。本論文では、この愛のプロセスにおいて「私」と他者との関係に変化が生じることを「制度化」という枠組みの中で改めて確認した。アルベルチヌへの一方的な愛というナルシスティックな色合いをぬぐいきれない関係の中、メルロ＝ポンティは逆に他者からの働きかけを見る。生と死、肯定と否定、過去と未来が互いに反転するような関係こそが「制度化」で哲学者が明らかにしようとした「鏡の関係」であり、「一つの『間』の創設 (*institution d'un entre des deux*)」(IP, 66) だった。このような「他者の介入」は同時期の文学をめぐる考察にも見られる。哲学者は先に挙げた『言語の文学的用法の研究』において、「錯綜体」に加えキアスマという用語にも注目し、「私」を構成するものとして私の知らない「他者が見る私」を挙げる (RULL, 103)。デカルトのコギトとは異なり、「私」は自身の知らないものによって作られ、この関係が後期思想の「肉」につながっていく。またプルーストに関しても、スワンがヴァントゥイユのソナタを聴く場面、「結晶化」という用語がいずれもデカルトを批判する文脈で用いられている¹⁹⁾。こうした考察を文学作品の解釈から辿ることは「文学と哲学の重なり」を意識したメルロ＝ポンティを理解する上で重要であろう。

(大阪教育大学准教授)

18) *Recherches sur l'usage littéraire du langage*, Metis Presses, Genève, 2013, pp.129-142. 以下 RULL.

19) *Notes de cours, 1959-1961*, Gallimard, coll. «NRF», 1996, pp. 190-193, *Le Visible et l'invisible*, Gallimard, coll. «Tel», 1993, p.327.